

夫のすべてを受けとめる、 清々しい日々。

中津川教会 西尾公身さん

平成23年11月、長年連れ添った夫が命を絶とうとした。一命はとりとめたが、西尾さんの心中は、「なぜ?」という疑念と「気づけなかった」という後悔が渦巻いた。これからは、精いっぱい夫に寄り添うと決心したものの、つい厳しい言葉を投げつけてしまうこともある。自分の心のあり方を変えるべきだと頭では理解していても、心を閉ざし無気力な生活を送る夫を目の当たりにすると素直に実践できない。そんなもどかしさのある人に相談すると、その人は自分の話にじっと耳を傾け、決して否定せず丸ごと受けとめてくれた。(私は夫を変えようとしていた。どういう状態であれ、すべてを受けとめることが「寄り添う」なのだ)と気づく。夫の穏やかな変化にささやかな喜びを感じつつ、一緒に歩めるこの瞬間が尊く、自分にとってありがたいと感じられるようになった。



清々しい毎日をおくる

今年、私たちのだけだが、これまでの生活スタイルを変えざるを得ない状況に見舞われた一年でした。それは、もちろん新型コロナウイルスの影響によるものです。みなさんのなかには、ウイルスに感染した方や、身近な人を亡くした方がいるかもしれません。そうした多くの人の身心しんの痛みが、この病気への不安とともに、一日も早くなくなることを祈っているのは私だけではないでしょう。ただ、生活スタイルがどう変わろうとも、忘れてはいけないことがあります。

「法華経ほけきょうの信仰に生きる人の生活の場は、どのようなところでも、そこが道場である」「法華経で修行とは、私たちの日常生活の最中みななかである(久保田正文くぼたしんぶん師)」といいます。その意味でみなさんは、このコロナ禍かにあつて、仮に不安や恐れを感じるときでも、思いやりを忘れずに人とふれあつてきたでしょうか。自粛警察じしゅくけいさつという言葉も生まれましたが、自分とは違う意見の人の姿勢をも理解し、やさしく、柔軟じゅうなんに受けとめられたでしょうか。人の、善よいところが見えて悪いところを探す気持ちが起きない。なんでもおいしくいただける。こういうことを無意識のうちにこなしているとするれば、きれいな心で円満な毎日をおくっているといえるのではないのでしょうか。

立正佼成会